

資源添加率向上技術開発研究(クルマエビ)

(予算区分 県単独 研究期間 平成20年度～)
担当：水産技術研究所浜名湖分場 吉田 彰

【研究の背景とねらい】

クルマエビは浜名湖の重要資源であり、資源増大のため種苗放流が行われています。その結果、大量放流以前(昭和40～54年)の平均漁獲量47トンが、大量放流後(昭和55～平成9年)に67トンまで増加しました。しかし、平成10年以降は激減し、過去10年間の平均は10トンを下回っています(図1)。

この減少の原因究明と放流手法の最適化により、漁獲量の回復を目指します。

【これまでに得られた成果】

(平成26年度までの成果)

- 湖内浅所で天然稚エビの着底量を定期的に調査しました。その結果、5～9月の長期に亘って着底が確認されました。
- 市場で経時的に体長測定を行い、天然群と放流群を分離しました(群分析)。その結果、平成22～25年度放流群の回収率は平均7.8%と推定されました。
- 平成23年放流群の放流効果をDNA分析から検討した結果(図2)、回収率は0.3%と推定されました。群分析との回収率の違いの検討は今後の課題となりました。
- これまでの放流箇所は、往年の豊漁期と比べて高塩分化し、流れも速くなっていると考えられることから、平成26年に、湖奥部への放流(奥部放流)を浜名漁協に提案し、現在まで適宜実施されています。

(平成27年度までの成果)

- 平成26年秋、27年春の漁獲量は前年同月を上回り、奥部放流の効果である可能性が考えられました。

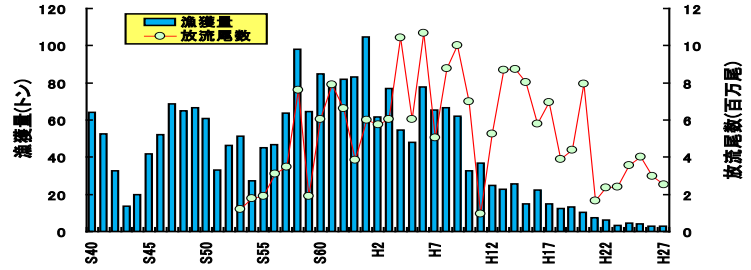


図1 浜名湖におけるクルマエビ漁獲量と種苗放流尾数

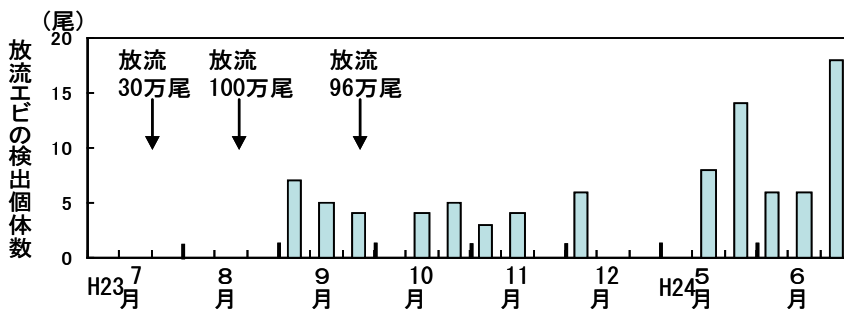


図2 DNA分析による平成23年放流群の検出状況

【期待される成果】

- 現在の浜名湖の環境に応じた、放流手法の最適化が図られます。

【今後の計画】

- 引き続き、群分析、DNA分析等を継続し、放流手法の最適化を図ります。

(作成 平成28年4月)